中学校二年の部　佳作

対象作品／木下史青著『博物館へ行こう』岩波書店

過去へタイムスリップ

弘前大学教育学部附属中学校　品川碧海

僕は、夏休みにつがる市にある「縄文住居展示資料館（カルコ）」と、岩手県盛岡市にある「もりおか歴史文化館」に行きました。カルコでは、竪穴住居と遮光器土偶と人骨等を見学しました。この人骨は本物で、縄文時代のものを発掘されたままの形で展示していて、見てはいけないものを見たような衝撃を受けました。もりおか歴史文化館では、昔の盛岡の風景がミニチュアで展示されていました。南部藩時代に使っていた着物、甲冑、日本刀等がピカピカと、とてもきれいな状態で展示されていました。

今回、読書感想文を書くために、何の本を読もうか考えながら、国語の教科書を見ていると、『博物館へ行こう』という本を見つけました。夏休みに資料館や文化館に行った自分にピッタリな本だと思い、図書館から借りて読むことにしました。

筆者は、東京国立博物館の展示デザイナーの木下史青さんです。展示デザイナーとは、僕たちが博物館に行ったときに、絵画や彫刻、土器や埴輪などと出会う場づくりのためのデザインをする仕事だそうです。この本には、一般にはあまり紹介されることが少ない博物館の裏側の仕事について、たくさん書かれてありました。「これはなんだろう」「どこで発見されたのか」「だれがどうやってつくったのか」「どんな価値があるのか」、色々な疑問から学術研究が始まるそうです。そして、モノを「分類」し、「名づけ」るのが仕事の基本だそうです。博物館では常に、分類の仕方、名前のつけ方をめぐって議論があることを初めて知りました。

木下さんは、二〇〇〇年の「土器の造形・縄文の動・弥生の静」という展覧会が印象深かったそうです。展示品が東北から九州まで、全国から三〇〇点以上集められたそうです。展覧会をみる人には、縄文時代・弥生時代までタイムスリップした気分になってもらいたいと工夫をしたそうです。夏休みに僕が行ったカルコでは、竪穴住居を通り抜けると遮光器土偶がありました。竪穴住居がタイムトンネルの役割をして

いたと思います。そして、現代からタイムスリップして、縄文時代の土偶に出会うという体験をしたのだと気づきました。

筆者は、自分を取りもどしたいときに美術館、博物館に行ったそうです。「モノをみてぼんやりすればいい。目の前にはこんなに美しいものがあるじゃないか。」と、心の目が開いてくるそうです。博物館に行った時には、なぜだかほっとするような、お気に入りの場所を探してみるのもおすすめだそうです。この本は、今まで知らなかった博物館の楽しみ方を教えてくれる内容でいっぱいでした。

僕は、この中で驚いたところがたくさんありました。一つは、東京国立博物館では、国宝や重要文化財の絵巻物や掛軸は、「一年間に四週間しか展示してはならない」という決まりがあることです。このようにして文化財が大切に守られているんだなと思いました。もう一つは、空気の管理についてです。鉄は空気中の酸素と結合すると錆びます。銀も放っておくと、黒くなってしまいます。大刀も、ただ置いておくだけでは文字や文様が見えなくなってしまいます。そこで、大刀専用のケースに入れるそうです。ケース内は窒素濃度九九・九八％以上を保っているそうです。ケースの中の空気も管理されていることが分かり驚きました。

八月七日のニュースで、東京の国立科学博物館で標本や資料を保存する資金が不足しているため、一億円を目標に寄付を募るクラウドファンディング（ＣＦ）を始めたと話題になりました。そして、翌朝の新聞に「ＣＦ開始九時間二十分で目標を超える金額が集まった」と書かれてありました。みんなで協力し、文化財を守ることができ良かったと思いました。

最後に僕がこの本の中で、一番印象に残ったところは、「博物館でモノをみるときに、想像力はとても大事だ。せっかくホンモノを目の前にしているのだから、想像力をはたらかせよう。」と書いてあったところです。なぜなら、僕は博物館に行っても今まであまり想像力をはたらかせて展示物を見たことがなかったからです。これからは、博物館に行ったときには、気になったモノの前に立ち止まり、じっと見つめてその時代に心を馳せ、想像力をはたらかせたいと思いました。